様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月 １３ 日現在

機関番号：３４４１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２５９５

研究課題名（和文）王朝交替期の文学における「遺民」像の変遷

研究課題名（英文）the transition of "Yi-ming" image at the dynasty alternations in China

研究代表者
稲垣　裕史（INAGAKI, Hiroshi）

大阪大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：８０７４８６０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、南宋末の読書人・王炎午の「文丞相を生祭するの文」に現われる、生者に死を勧める「生祭」という行為の源流を探り、王炎午の文章がどのように後代に読み継がれ、本来は隠逸者に近い形象であった「遺民」が、愛国主義者の形象を帯びてゆく過程を追ったものである。成果として、「生祭」の源流をたどり、読書人の文学的営みとして行う「生祭」には、必ず遊戯性が伴うことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本の中国文学研究において、南宋から元に至る伝統詩文は研究者の少ない分野であり、中国本国での盛んな議論に遅れを取らないためにも開拓が急がれる。この時代の文学の継承に重要な役割を果たしたのが南宋の「遺民」である。従来の研究では、「遺民」像の歴史的変遷を考慮せず、愛国主義の立場から「遺民」の文学を論ずるのが常であった。本研究は、「遺民」の語義の変遷、および「遺民」に分類されるキャラクターの推移に注目し、従来の研究の前提であったナショナリズム的「遺民」イメージの成立過程を検証するのが目的である。また、近代以降を対象としたナショナリズム研究にも学際的影響を及ぼすことを目標としている。

研究成果の概要（英文）：Wang Yan-wu 王炎午, a traditional literatus at the end of Southern-Song 南宋 era, wrote a prose named 生祭文丞相文, to offer sacrifice to living Wen Tian-xiang 文天祥, the last prime minister of Southern-Song Dynasty. this study researched the origin and development of "Sheng-ji 生祭", to offer sacrifice to living people, explored how Wang's opus was read by the litarati at later periods, and how the image of "Yi-ming 遺民", the litera of a fallen dynasty, was changed from a recluse to a patriot. the fruits of this study are as follows: clarified the origin and development of "Sheng-ji"; discovered the fact that "Sheng-ji" as literature written by traditional literati must include an implication of playability.

研究分野：宋代文学

キーワード：遺民　生祭

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

王朝交替期の文学における「遺民」像の変遷

大阪大谷大学　稲垣裕史

１．研究開始当初の背景

申請者は、南宋末～元初の文学について研究を続けてきた。とりわけ、宋王朝にアイデンティティを持ち、新たに立った元王朝への出仕を拒んだ、「遺民」と呼ばれる読書人に関心を持ち、彼らが自らの政治的立場を、どのように文学（詩文）に表現しているかに焦点を当ててきた。

「遺民」には、宋王朝の滅亡以前、すでに官職を得ていた者と、官職を得ぬまま一生を終えた者がある。前者の代表に、宋朝最後の宰相となった文天祥があり、後者には、後代まで名を知られる王炎午がある。王炎午は文天祥の同郷の後輩で、彼の作品に、元朝の捕虜となった文天祥に自決を勧める「文丞相を生祭するの文（生祭文丞相文）」がある。

文天祥は王炎午の恩人であり、恩人に自決を勧める文は、これに先立つ文学史に先例を見ない。このような特異な文学が生まれる背景には、宋王朝を劃期とする何かしらの社会的・文化的背景がある。その淵源を見極めようとする欲求が、研究開始当初の背景にあった。

２．研究の目的

日本の中国文学研究において、南宋から元に至る伝統詩文は研究者の少ない分野であり、中国本国での盛んな議論に遅れを取らぬよう、開拓が急がれる。この時代の文学の継承に重要な役割を果たしたのが南宋の「遺民」である。従来の研究では、「遺民」像の歴史的変遷を考慮せず、愛国主義の立場から「遺民」の文学を論ずるのが常であった。

本研究は、「遺民」の語義の変遷、および「遺民」に分類されるキャラクターの推移に注目し、従来の研究の前提であったナショナリズム的「遺民」イメージの成立過程を検証するのが目的である。この検証を通じて、中国古典文学におけるナショナリズム的言説の発生から隆盛にいたる経緯を明らかにし、近代以降を対象としたナショナリズム研究にも学際的影響を及ぼすことを目標としている。

３．研究の方法

当初の計画と異なり、「遺民」の語義の変遷ではなく、「生祭」の源流を探ることで、ナショナリズム的言説の発生から隆盛にいたる経緯を明らかにしようと試みた。当初、「生祭」の源流を探る作業は研究の一部分を占める予定であり、淵源は北宋にあり、展開においては、明末が大きな転機であるとの見通しを立てていた。しかし、研究を進めてゆくうちに、明代の展開を追う作業が予想よりも遥かに大きな時間と労力を必要とすることに気付き、「生祭」の展開を追う作業が研究活動の中心となった。

研究計画では、電子検索システム「中国基本古籍庫」を導入し、これを利用して「遺民」「生祭」等の用例を集めようと考えていた。ところが、申請者が導入できたのは「中国基本古籍庫」のオフライン版であり、全ての文献を制限なく検索できるオンライン版と異なり、自分で購入した文献しか検索できない。このため、用例収集に多くの取りこぼしが発生し、用例の不足から、妥当な結論に至らなかった。

研究期間の延長を申請した年度、中国の文献検索サイト「国学大師」「中国哲学書電子化計画」の２つが、オフライン版の「中国基本古籍庫」よりも、網羅的に用例を収集できることに気付いた。以降、２つのサイトから「生祭」の用例を集め、それを整理し、妥当な結論に行き着くことを目指した。

４．研究成果

研究成果として、以下の２点が明らかとなった。まず、行為としての「生祭」は、明代にとりわけ多く見られ、行為としての「生祭」が、死にゆく者を生前に祭る儀式的なものと、読書人のパフォーマンスとして行われる遊戯的なものの２つに分かれる。つぎに、読書人の行う「生祭」は、儀式的と遊戯的、双方のニュアンスを含み、必ず諧謔性を伴う。

「生祭」という語を、王炎午のごとく生者を生前に祭る意に用いる例は、明代以降の文献に顕著となる。明代では、儀式的な例として左光斗や張国維のエピソード、遊戯的な例として屠隆、張獻翼らの、知人を「生祭」する諧謔的作品がある。

読書人の行う「生祭」に諧謔性があることは、宋代から民国期にいたる「生祭」に関わる作品の系譜から分かる。王炎午の発想の淵源は、北宋の太学で欧陽脩に対して書かれた戯文であり、南宋の王炎午の文、明代の張獻翼の詩、いずれも読書人同士の遊戯的な詩文作成の場から生まれている。清代には、盧見曾「蒋蘿村を生祭するの文（生祭蒋蘿村文）」、民国期には、南國紅豆樓

主「王炎午の生祭に謝するの文（謝王炎午生祭文）」があり、いずれも儀式とは本質的に異なる、諧謔的な作品である。

研究の出発点であった「生祭」の淵源については、当初の予想通り、宋王朝に特有の「太学生の気風」にあり、かつて太学生であった王炎午がこれを継承し、「文丞相を生祭するの文」を作ったと考えられる。王炎午は、この一文によって後世に名を残し、明朝～民国期に至るまで、読書人の詩文の中で、「義士」として繰り返し顕彰される。王朝交替期、もしくは旧時代から近代への転換期、王炎午の文章はナショナリズムの高揚に対して一定の役割を果たしたとしてよい。

以上の成果について、①「生祭」の源流、②盧見曾の作品の分析、③「生祭」の遊戯性の３つの観点から、現在、論文を作成している。それらの公刊をもって、目に見える形での成果としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考